

2005年 8月 第27号 By FP Compass

暑中お見舞い申し上げます。

1. サイレントキラー『アスベスト(石綿)』は他人ごとではない!

クボタのマスコミ発表の後、連日のように新聞、テレビ等でアスベストの件が大きくクローズアップしています。

まずもって私たちが認識しなければならないのは、日本は世界で最もアスベストを輸入している、いわゆるアスベスト大国であると言うことです。

アスベストの世界総生産量のほとんどを日本で輸入しています。

昭和44年から平成5年までの間は毎年20万トン以上輸入をしていました。

特に、昭和48年から30万トン以上の輸入量となった年度も多く見受けられます。

平成13年度でもまだ24,653トンものアスベストが輸入されています。

そして、最も危惧すべきは、過去の建築物や建材等にごく普通に使用されているということ、いまだにアスベストが露出している場合が多いと言うことです。

JR大阪駅での天井部分にむき出しのアスベストの吹きつけが大きく報道されました。

山形県内でも40数カ所の公共物件にアスベストの露出が発見されましたが、これはほんの氷山の一角にすぎません。

以前にご紹介したハインリッヒの法則を思い出して下さい。民間の建築物も検査した場合には、とてつもない件数になると思います。

身近な例で、私が記憶にあるところでも、ボイラー室や機械室には大抵アスベストの吹き付けがされていました。

また、鉄骨などにも吹き付けられているものを何ヶ所かで目撃しています。

アスベストによる健康被害の特徴は、発症に30年とか40年の時間がかかる、いわゆる潜伏期間が超長期であることです。もう一つは発症するのがほとんど「悪性中皮腫」というガンであるということです。

ちなみに悪性中皮腫とは、肺や心臓を取り囲む胸膜、心膜や腹膜に発生する悪性の腫瘍で、ほとんどがアスベストが原因で発生するとされ、アスベスト曝露を示す「シグナル腫瘍」とも呼ばれます。特効薬は今のところ無いそうです。

1995年に日本における悪性中皮腫者数が500人確認されています。

そのうち労災認定数は13人とごく僅かです。

1999年には647人に対し25人の労災認定となりました。

これは、いかに労災認定が困難かを物語っています。

7月28日の新聞ではアスベスト労災を認定しやすくする旨が書いてありました。

しかし、一次的当事者である建材製造メーカーの作業員、建設作業員等は政府労災保険にて救済の道は開けてくることでしょうが、二次的当事者である家族や、アスベスト関連工場周辺住民、アスベストを大量に使用している建物に知らずに訪問している人たちは労災の認定は不可能となります。（公害に準じる法的整備が必要となります）

また、建物所有者へ対する損害賠償という手段も、因果関係を特定することが極めて困難なため、賠償金を勝ち取ることは事実上無理と言えます。

アメリカではアスベストによるPL（製造物責任）訴訟により、多くの損害保険会社が巨額な保険金の支払いにより危機的な状況に陥りました。

日本の損害保険会社では、これを重く受け止め、PLなどの賠償責任保険にアスベストに関する免責条項を入れ、リスクを回避しています。

よって、日本の製造メーカー、建設会社、施設の所有管理者は保険によるリスクファイナンシングの手当が出来ない状況となりました。

今後の予想されること

①悪性中皮腫による死亡数が年々増える。

第75回日本産業衛生学会資料によると、2030年までに年々死亡数が増え続け、最大年間6万人弱の方々が死亡すると推定しています。

②労災認定数が増加し労災保険の財政を圧迫する。

③損害保険でのリスク移転が事実上不可能となり、製造メーカーなどの関連業種の財務を圧迫し、中には損害賠償金の支払いもままならず、倒産の可能性が大きい会社も出る。

以上をふまえて考慮すれば、今後、国や行政、企業からの支援及び賠償金は、財務的な事情により、あまり期待できなくなるのではないか。

一時的当事者の方はもちろん、それ以外の方々もどこでアスベストに曝露しているかわからない状況では他人事ではありません。

そこで、自助努力を今からでも行って、アスベストによる健康被害が生じても、家庭や企業の財務基盤が揺るがないようにすることが重要となります。

2. ここがヘンだよ日本の保険

今までのこのシリーズでも何度か触れていますが、生命保険の長期資産形成・運用機能という側面からお話ししたいと思います。

10年を超える20年30年、時には50年という期間で資産運用できる金融商品を思い浮かぶことができるでしょうか。

例えば、銀行に行って30年間運用したいと相談した場合、銀行独自の金融商品は恐らくお奨めしないし、商品そのものがないと思います。

銀行は従来から、短期的資金のニーズに応えるべく営業しています。

逆に生命保険会社は当初から長期的資金ニーズというものを前提としています。

よって、銀行と保険会社の取扱商品の期間に棲み分けされていました。

つまり、長期資産形成や運用は生命保険会社が得意とする分野となります。

逆に、銀行は短期的な運用とか決済性に強みを持つことは当然と言えます。

保険商品は長期の資産形成商品と位置づける事が自然となります。

家庭や、企業においても財務的強化はリスクマネジメント上でも必要不可欠となります。その財務強化の中で、先述の通り短期は銀行、長期は生命保険と分けて考えるべきと思います。短期のものは利殖性に大きな期待を求める、決済性を重視した考え方。長期のものは途中解約はせず、じっくりと複利の効用を享受することが大切です。

保険で資産形成するメリットに一つ目は、目的を達成する前に死亡や高度障害になったときもしっかりした保険金が遺族または本人が受け取ることが出来るということです。

最近は保険料支払い免除特約付の保険も増えています。

例えば、3大疾病になったときや、特定障害状態、また要介護状態になったときに、保険料の支払いが免除され、当初の目的が達成されます。

二つ目は、口座からの振替などで自動的に保険料に充当され、毎回意識しなくともしっかりと形成されることです。

商品としては、現在終身保険が適しているでしょう。

ただし、注意点がひとつだけあります。

それは期間が長いだけにインフレリスクに対応できるかどうかです。

史上最低の予定利率で固定されている定額型の終身保険では、インフレによる保険価値が目減りするリスクが発生するかも知れません。

現時点でのベストな選択肢は、変額型終身保険と積立利率変動型終身保険といえます。

資産性の高い生命保険のメリットは、いわゆる掛け捨てと言われる保険と比較して余りあるものと思います。

掛け捨て型は目先の保険料は安いですが、保険期間が短く、解約返戻金はほとんど貯まらず、死亡・高度障害という保障だけの一元的な機能しかありません。

資産性の高い保険（終身保険等）は保障としての面と、お金の貯まり（CV：キャッシュバリュー）という二元的な機能も充実し、そのCVが家庭や企業の財務を強化しリスクに強い体質をつくることが出来ます。

また、契約者貸付や部分解約、全部解約等によるキャッシング（現金化：約1週間）が可能なものもあり、予想以上に使い勝手が良くなります。

保険機能としても、特に終身タイプは解約していかなければ必ずや保険金支払いの時期は来ますので、確実に担保されます。

その機能は相続対策や事業承継対策などに絶大なる効果を發揮します。

最後に、長期資産形成の大きなメリットはなんと言っても複利の効用といえます。

例えば利率5%で運用したと仮定しますと、5年間の運用で受取倍率が1.27倍となり年平均利回りは5.52%となります。

これを30年間運用した場合は受取倍率は4.32倍となり年平均利回りは11.07%となり、その差は歴然とします。

複利の効用を享受するのには時間が必要となります。

よって、時間を多く使える若い人ほど無理なく資産を大きく殖やすことが出来ます。

生命保険の長期資産形成機能を利用することにより、総支払い生命保険料を大きく削減出来ます。そして大きな資産を形成しますので、ライフプランにおいてもゆとりが出来、結果的にリスクに強い体質をつくることが出来ます。

3. 安全運転のポイント

平成16年の全国交通事故統計における、違反別交通事故件数（人身事故件数）をみると、スピード違反の占める割合は、死亡事故の場合10.9%（711件）にもなります。

そこで今回は、スピードの問題を考えてみます。

①スピードを出すほど衝撃力は増大する。

車が衝突したときの衝撃力とスピードとの関係をみると、衝撃力はスピードの2乗に比例して大きくなります。つまり、スピードが2倍で衝撃力は4倍、スピードが3倍で衝撃力は9倍にもなります。

②スピードを出すほど曲がりにくくなる。

カーブを走行するとき、車が外側に飛び出そうとする力が働きます。これは遠心力によるもので、スピードが早いほど強く働きます。この遠心力も衝撃力と同じスピードの2乗に比例します。

③スピードを出すほど見えにくくなる。

動きながら物を見たり、動いているものを見るときの視力を「動体視力」といいます。

「動体視力」はスピードが早くなればなるほど低下します。また、視野も狭くなるので、視野からはずれた部分がすべてぼやけて見えるため、危険の発見が遅れたり、見落とし、見誤りなどが起こりやすくなります。

④スピードを出すと1秒間に走る距離は大きくなり止まりにくくなる。

時速 20kmでは1秒間に約 5.6m走る	*停止距離 約 9m
-----------------------	------------

時速 40kmでは1秒間に約 11.1m走る	*停止距離 約 22m
------------------------	-------------

時速 60kmでは1秒間に約 16.7m走る	*停止距離 約 44m
------------------------	-------------

時速 80kmでは1秒間に約 22.2m走る	*停止距離 約 76m
------------------------	-------------

時速 100kmでは1秒間に約 27.8m走る	*停止距離 約 112m
-------------------------	--------------

ちょっとした脇見や、携帯電話の操作などの時間でもかなり進むことになるので、目から入る危険情報の認知が遅れてしまいます。（＊乾いた舗装道路にての急ブレーキ）

スピードの出し過ぎは、運転にさまざまな危険を及ぼします。安全な走行をするためには、スピードをコントロールすることが重要なポイントとなります。

雨天時や積雪時、住宅街の狭い道、通学路等を走行するときは、状況に応じ十分にスピードを落とすことも必要となります。

ただし、見通しも良く道路環境が良い場合は、必要以上にスピードを落とさなくともよいと思います。それは移動時間の軽減という車のメリット（リターン）があるからです。

もちろんその時も法定最高速度の遵守は必要です。

発行者 有限会社 FPコンパス

武田幸夫 スタッフ：木村正照、阿部信、深瀬幸子、多田恵子

〒994-0054 山形県天童市荒谷2589

TEL 023-654-8831 FAX 023-654-8832

E-mail tide@mm.neweb.ne.jp